

「誰一人取り残さない高知視覚リハに  
必要なことー真の多職種連携に支え  
られた持続可能なリハシステム発展  
を目指してー」

視覚障害リハビリテーション協会

吉野由美子

# 自己紹介

- 年齢は73歳
- ロービジョン(弱視)  
右(0.02)、左(0.15)※矯正視力
- 大腿骨の発育不全による肢体障害
- 1999年4月から高知女子大学  
(現県立高知大学)に勤務
- 2009年4月から10年間視覚障害リ  
ハビリテーション協会長
- 現在は自分ごととして高齢視覚障  
害リハビリテーションの普及活動を行  
っている



写真 パラリンピックの聖火ランナーとしてパフォーマンス

# 講演の内容

- 1 高知の真の連携に裏打ちされたシステム構築を可能にした要素について
- 2 地域共生社会の構築と視覚リハ専門家の位置づけ
- 3 これから直面する新しい課題（視覚リハを受けられず取り残されている方達の状況）
- 4 見えない・見えにくい方達を誰も取り残さないために必要なこと

1

真の連携に裏打ちされた  
システム構築を可能にした要素

# 1999年当時の高知の状況

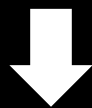
- 視覚障害者に対する専門機関は盲学校と高知市点字図書館、盲老人ホームくすのき荘のみ
- 先天性視覚障害者と中途視覚障害者のニーズの違いについての認識はほとんど皆無
- 「視覚障害になると何もできなくなる」が一般のイメージ
- 「高知の視覚障害者は高齢者が多いから歩行訓練や生活訓練に対するニーズはない」という県の認識



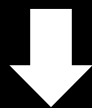
視覚リハに対するニーズは表面化していなかった

# 視覚障害者自立支援システム確立のため ニーズ掘り起こしは絶対的条件

- ・視覚リハなど福祉サービスを拡充するには、そのサービスに対するニーズの存在が一般社会に認識されることが不可欠



- ・視覚リハに対する潜在化したニーズが顕在化するためには、視覚リハサービスを利用して「良かった」と当事者・家族・関係者が実感する経験を経なければならない



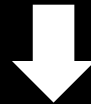
「良かった」という体験をしてもらうためには、サービス提供側が出て行くこと」

# 視覚リハの効果を実感して もらうための作戦

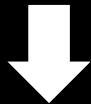
- すぐに役立つ便利グッズや工夫を当事者や関係者に視覚障害生活訓練指導員(以下、歩行訓練士)が紹介する



- 諦めていたことが機器や工夫でできるようになると次のやりたいことが出てくる



- 歩行や日常生活訓練の動機付けにつなげる



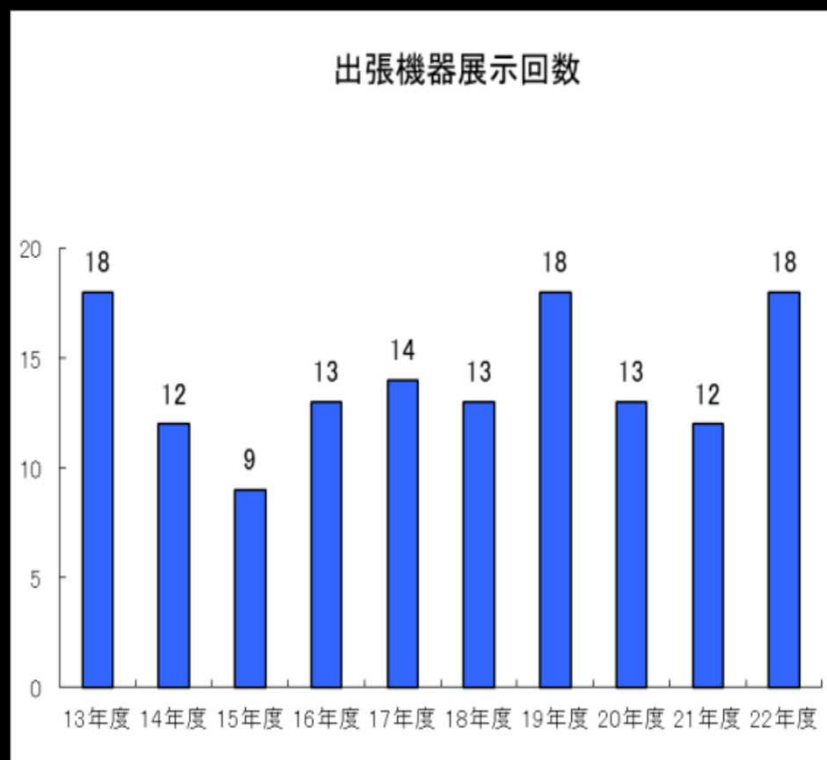
機器や訓練を訪問によって届けるための拠点としてルミエールサロンを県職員提案の予算を元に設立

# 職員提案採択で得た物

- 職員提案事業は、県の直轄の事業であり、県障害福祉課との緊密な関係が得られた
- 高知県立盲学校内に常設の機器展示室「ルミエールサロン」の開設
- 視覚障害当事者・関係者に紹介する機器を買う予算
- 常勤の歩行訓練士1人分の人件費
- 事業を円滑に遂行するために行政職員・歩行訓練士・盲学校教員等の相互理解と立場を超えた連帯の必要性を確認し実践（年に数回の連携会議の実施）



# 出前機器展示会・相談会の実施



- ・年10回以上の出張機器展示・相談会の開催
- ・会場は地域の福祉関係施設  
の他、病院、イベント会場、郵便局や観光市場など様々



・当事者が一人も来ないこともあったが、機器をみて喜ぶ当事者の姿を県職員や保健師や福祉関係者に直に見てもらうことができて来場者も増え、多職種の方達が視覚リハの効果を実感するようになった。

ニーズを掘り起こす→対象が広がる→  
新しい知識の吸収→専門家と繋がるの必要



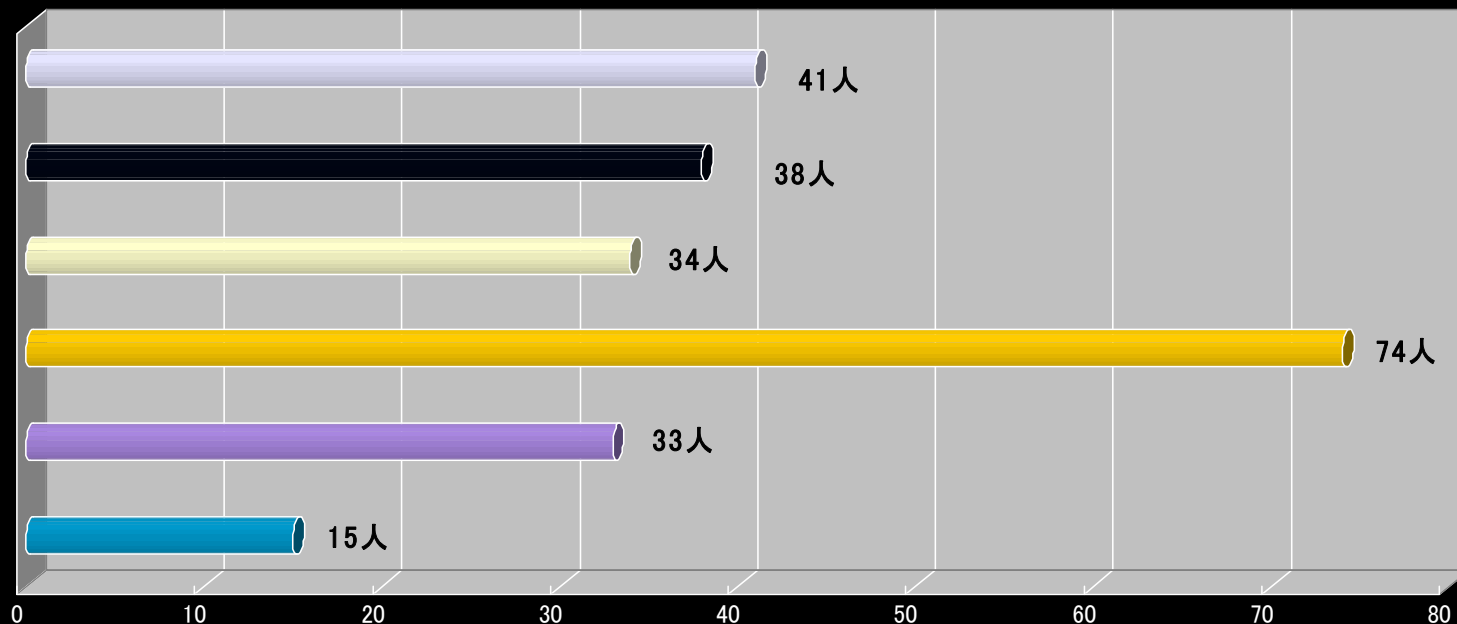
- 最初は中途視覚障害者を対象とするリハを想定
- しかし地域の相談会では乳幼児や、視覚と他の障害を併せ持つ重複障害児、盲学校卒業後に家に引きこもってしまった方、高齢視覚障害者など対象が広がっていった



- 対象が広がると共に新しい課題が見え、新しい専門家との連携が必要→新たな知識の模索→新しい相談者という循環ができた

# 2004年職員提案「ルミエールサロン ステップアップ」によるロービジョンケア 講演会参加者数(合計235人)

- ロービジョンケアのすばらしい効果(7/11)
- 視覚と他の障害を重複する人たちのロービジョンケア(7/18)
- 障害を併せもつ子どもたちの自己決定を引き出すための視機能評価と視環境改善(8/8)
- 乳幼児のための視覚評価法(8/23)
- ロービジョンケアの実際を学ぶ(9/12)
- 視覚と他の障害を重複する子どもの発達と視機能評価、遊び指導(10/3)



# ロービジョンケアワークショップ 参加者数(合計108人)



# 高知福祉機器展への参加

- ・2004年より視覚・聴覚ブースとしてルミエールサロンが出展
- ・スタッフはPT、OT、ST、ヘルパーなどの各種専門家がボランティアで総合機器展示会を開催（キッズ・視覚聴覚・リフト・ベッド・住宅改修・靴・車いす・コミュニケーション・自助具・おしり・嚙下など）
- ・平成17年度は第5回として、2349名が来場



# 視覚リハ普及・啓発活動への参加

- 2004年第26回視覚障害乳幼児研究全国大会開催
- 2005年より高知リハビリテーション研究会にて視覚リハについて発表
- 2007年9月第33回日本重症心身障害学会学術集会参加（発表と機器展示）
- 2010年1月全国視覚障害早期教育研究会開催
- 2010年9月第18回視覚障害リハビリテーション研究発表大会開催
- 2012年9月在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク第18回全国の集いin高知
- 2014年7月高知リハビリテーション研究会メインテーマ 視覚障害リハビリテーション等

# 県内密着型の啓発活動

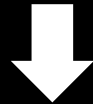
- 福祉系大学・介護専門学校等での講義
- 県職員・市町村職員に対する研修活動
- ホームヘルパー研修・介護職員研修・ケアマネージャー研修等へ講師としての協力



視覚障害者の現状、ニーズ、視覚リハの必要性についてあらゆる機会を捉えて啓発活動を行い、視覚リハに対するニーズに気づく関係者を増やす

# 福祉→医療の連帯の模索

- ルミエールで活動を行えば行うほど何らかの障害が残ると分かった時に眼科から「視覚リハ」に繋がることの重要性、見えない・見えにくい状態になってから間をおかずに視覚リハにつなげる重要性を痛感
- あらゆる機会に眼科医療との連携を模索

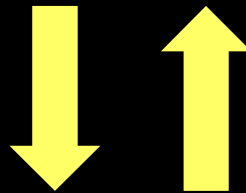


- 高知日赤眼科での相談会開催・高知眼科医会への啓発活動・高知大学病院での眼科勉強会などでの講演と機器展示等を繰り返し徐々に理解を得られるようになった



# 医療⇔福祉の双方向の連携へ

- 歩行訓練士の別府さんが視能訓練士の資格を取得、町田病院に就職したことで、病院の中から始まる視覚リハが開始



- 歩行訓練士としてルミエールで働いていた時の経験と人脈を手がかりに、福祉の側から医療ぐことが必要な時に、医療に繋がりがやすい流れができ、双方向の連携ができつつある

# 歩行訓練士という専門職の役割を 認めた上での連携

- 職員提案事業で始まったルミエールサロンは歩行訓練士(視覚リハ専門家)がその専門的な能力を発揮して、出て行ってニーズを掘り起こすという役割を公に保障した
- ニーズを媒介として、福祉・教育分野の多職種 of 専門家と連携を築いた
- その基盤の上で医療との双方向の連携を築くことができつつある

# 高知の視覚リハシステムは トップクラスの質を持つ

- 町田病院で行われている病院から始まる医学的リハビリテーションの動き
- 日本眼科医会が推進する医療から福祉・教育等を紹介するスマートサイトの後押し
- 20年かけて作り上げてきたルミエールサロンの歩行訓練士の方達と行政・医療・福祉現場・教育等との連携
- 自分たちができることとできないことを知った上で行う役割分担の上に立った連携

## 2

地域共生社会の構築の中での  
視覚リハ領域の関わり  
視覚リハ領域の専門性を  
担う歩行訓練士の位置づけ

残念ながら視覚リハ専門職としての  
歩行訓練士は認知されていない

# 「新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン」

(平成27年9月 厚生労働省「新たな福祉サービスのシステム等のあり方検討PT」報告)

## 4つの改革

### 新しい地域包括支援体制

[包括的な相談支援システム]

#### 1 包括的な相談から見立て、支援調整の組み立て+資源開発

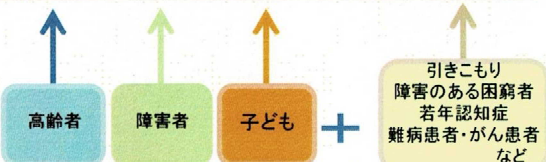
- 地域により  
・ワンストップ型  
・連携強化型 ] による対応
- 地域をフィールドに、保健福祉と雇用や農業、教育など異分野とも連携

誰もがそのニーズに合った支援を受けられる地域づくり

#### 2 高齢、障害、児童等への総合的な支援の提供

- 多世代交流・多機能型の福祉拠点の整備推進
- ・運営ノウハウの共有
- ・規制緩和の検討 等
- 1を通じた総合的な支援の提供

サービス提供の  
か地域づくりの  
点としても活用

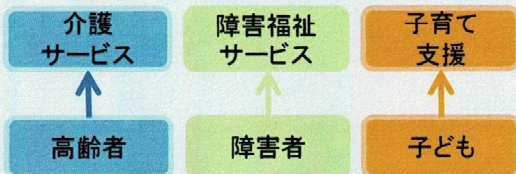


### 背景・課題

#### ①福祉ニーズの多様化・複雑化

複合的な課題を有する場合や分野横断的な対応等に課題

[制度ごとのサービス提供]



#### ②高齢化の中で人口減少が進行

地域の実情に応じた体制整備や人材確保が課題

### 新しい支援体制を支える環境の整備

#### 4 総合的な人材の育成・確保

- 1を可能とするコーディネート人材の育成
- 福祉分野横断的な研修の実施
- 人材の移動促進 等

#### 3 効果的・効率的なサービス提供のための生産性向上

- 先進的な技術等を用いたサービス提供手法の効率化
- 業務の流れの見直しなど効率的なサービスの促進
- 人材の機能分化など良質で効果的なサービスの促進 等

地域住民の参画と協働により、誰もが支え合う共生社会の実現

# (例)地域リハビリテーション推進事業 から除外されている歩行訓練士

- 超高齢化と人口減少という新しい社会を支えるために、「地域共生社会」の構築が検討されている
- 特に健康寿命を延ばす介護予防等に対する支援としてPT. OT. ST等のリハ専門職や栄養士・口腔ケアに関わる方達などが地域リハの専門性を高めるための活動をおこなう時に、県や地方自治体などから補助金がおりのシステムがある
- 災害対策において安全な避難や避難所の運営等について今専門家チームが作られている

※歩行訓練士は、これらどこにおいても専門家の  
位置づけを得ていない

3

高知ではすでに直面している  
新しいニーズと深まる課題とは

# 高齢視覚障害者の抱える問題と 視覚リハ

- 高齢視覚障害者が全視覚障害者の7割を超えている。  
正確な数字はないが高齢になってから見えない・見えにくい状態になる方が多い
- 見えない・見えにくい状態になること、まして高齢になってからそうなることは「何もできないと諦めてしまえ」
- 視覚障害以外にいろいろな病気や障害を併せ持っている
- 単独の高齢視覚障害者が増加している
- 家族からの支援が得にくい

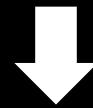


**多問題の解決をしないと支援に繋がらない**



# 介護保険でのサービスの中に 視覚障害に特化した物はない

- 介護保険制度の中では、視覚障害に特化したサービスが提供されていない
- 視覚障害に特化したサービスは手帳を取得して障害者総合支援法の適応で受けなければならない。しかし高齢になってからの中途視覚障害者は障害者総合支援法によるサービスを知らない
- 介護関係者は、見えない・見えにくい高齢者のケアの仕方を知らない
- 視覚リハの効果についても知られていない



ケアマネ等介護関係者へのさらなる啓発が必要

# 眼に関する医療的なケアを受けられず 視覚リハサービスからも取り残されている 方達の問題

- 特別養護老人ホーム等老人ホーム等には眼科医が非常勤としても入っている例は少ない
- 知的障害者や肢体不自由、重症心身障害者の施設なども眼科医療が届いていない
- 歩行訓練士が関わることも希



**歩行訓練士の介入が必要**

視覚リハサービスを  
必要としている対象範囲は  
さらに広範囲になり  
問題も複雑になって行く

多様な行政分野  
多様な専門家集団との  
連携が必要となる

# 4

見えない・見えにくい方達を誰も取り残さないために必要なこと  
—高知の視覚リハシステムの未来の姿—

誰一人取り残さない高知の  
視覚リハを実現するためには  
互いの信頼関係に裏打ちされた  
質の高い医療・福祉・教育・行政等の  
多職種連携が必須  
質の高い専門性を持つ  
歩行訓練士の存在が必須

# 専門家(職)集団としての保障

- ここまで質の高い視覚リハシステムが構築できたのは、専門職として専念する歩行訓練士の存在が必須であった
- 未来に向けてもそれを保障する必要がある
- 専門職集団として、臨床経験が蓄積され後輩に受け継がれるようなシステムが必要
- 高知リハ研究会や高知福祉機器展等の運営に視覚リハ領域の専門家として参加し続けることが必要
- 蓄積された知見を事例などとして関連学会や勉強会で発表したり、論文化して、発信すると同時に新しい知見を吸収して高知での実践に生かすことが必要

# 専門家(職)集団の保障のために

- 歩行訓練士の持つ専門性を必要とする行政機関・医療機関・福祉関係機関等が単独で一人の歩行訓練士を雇用することは不可能



- ルミエールサロンを高知県視覚リハセンターとして位置づけ、広く県全域をカバーする
- 歩行訓練士の増員が必須
- 歩行訓練士が専門職集団として互いに切磋琢磨できよう集中して働けるような組織体系を構築する

# センター運営の考え方と財源

- 県からの委託(地域生活支援事業)の増額
- 県下の市町村が費用を分担
- 眼科医会だけでなく、高知県医師会などが育成と雇用に関わる費用を分担
- 老人ホーム・介護保険関係施設・視覚リハサービスを必要とする福祉施設などの費用負担等のできるシステムを構築



# さらなる発展を願って 吉野の思い

- 病院から始まる、医学的リハから始まる視覚リハは、視覚リハのあるべき姿
- 医療⇔福祉・教育などの双方向の連携が私の追求する視覚リハシステム
- ルミエールサロン20年の地道な活動が広く理解と協力を得て今日の高知の視覚リハシステムを支えている
- これを全国モデル、大都市圏ではない地域のモデルとして育てていただきたい

ご静聴ありがとうございました

## 私のブログ

「吉野由美子の考えていることとしてい  
ること」に

今日のプレゼンをPDFで残します  
後からゆっくり見てください

URL <https://yoshino-yumiko.net/>